

第11号

Σωηή

ゾーエー



目次

卒舎生近況報告(松村いつみ).....	3
在舎生近況報告(菅家結).....	3
『この世界の片隅に』を見ての感想対談(手束響希、三宅能阿、伊藤紫歩).....	4
夏目漱石『ころ』読書会報告(鶴田賢一郎).....	5
編集後記(ZOE編集部).....	6

表紙写真撮影:菅家結

卒舎生近況報告

2022年卒舎 松村いつみ(東京医科歯科大学)

こんにちは！ 松村です。皆さん、お元気ですか？ 私は学生の時よりも明らかに運動量が増え、早寝早起きの健康的な毎日です。

「社会人になって」というお題で何か書くようにとのことだったので社会人になって何が変わったかを考えてみましたが、やっぱりお金の使い方のような気がします。特に食費についてですね。学生のときは豆腐と竹輪ばかり買っていましたが、お肉を買ったり魚を買ったり、あとはちょっといい感じの調味料とかを買うようになりました。それからスイーツとかも買ってしまったり...。「頑張ってるんだからこれくらい良いでしょ」という言い訳のもとお財布の紐がゆるみ始めているので、買い過ぎないように気を付けようと思っています。でもちょっとは仕方がないことなんです。だって家の近くにすごく大きなオーケー(*1)があるから！ 高田馬場とは比べ物にならないくらい店内が広くて、品揃えも良くて誘惑だらけなのです。皆さんも行ったらきっと買い過ぎちゃうと思います。

そういえば入職してから何回か夜勤(*2)がありました。まだ一回もおぼけは見えていません。会えたらまた報告します。

*1 関東地方で展開するスーパーマーケットの「オーケースタ」のこと。

*2 松村さんは卒舎後、東京医科歯科大学病院で看護師として勤務されています

在舎生近況報告

早稲田大学理工学術院創造理工学研究科建築学専攻
菅家結

研究室活動が本格化して3ヶ月。なかなかふしぎな感覚です。やっていることは社会人に近いのに、授業もあってバイトもして、遊んでいるような働いているような...。そんな私の大学院1年目の研究室の様子をお伝えできたらと思います。

まず、私が所属しているのは早稲田大学理工学術院創造理工学研究科の古谷誠章+藤井由理研究室です。意匠系研究室で、いわゆる「建築」のイメージのまんまの研究室だと思います。大学院1年目は通称Master1年で、M1と呼ばれています。我ら古谷研はM1の間が一番忙しく、研究室の運営を全て担います。信愛学舎でいう三役のようなものです。係、プロジェクト、ゼミが主な活動です。私は巨匠建築家の研究である菊竹清訓研究PJ(*1)、コルビュジエPJと、大成建設と共同研究をする次世代医療研究会PJ、そして空き家の改修をする大崎上島PJの4つに所属しています。大崎上島PJはリーダーを担当し、夏に広島の大崎上島の空き家を改修します。今年の信愛学舎の合宿先も広島ですね。おかげで7、8月中に4回広島に行くことになりそうです。このノウハウを活かして信愛学舎の改修や舎監宅の改修にも手を出してみたいところです。その影響か、最近はDIYの動画をたくさん見ることはまっています。

そしてPJで地方に行くことを出張と呼びます。もうすでに島根や佐渡島に行きましたが、今後は大崎、北海道、新潟などに飛び、こころは完全に社会人みたいです。ちゃんと交通費と宿泊費は研究費用として落ちますので、小旅行の感覚ですが、しょっちゅう行くとややはり疲れますね。

私の研究室は早稲田の建築学科の大学院では最大規模なので、会社みたいな構造になっています。教授は社長みたいな扱いで、みんなボスと呼びます。なかなか会えない存在で、助手や研究員が我々の直属の上司です。ゼミも私たちが指導します。去年は研究室で1番下っ端だったのに突然指導する側であたふたしています。信愛もそうです。先輩として見られることが突然増えて変な感じです。さらに今は作品シート製作、つまり就活についはいりました...。院生になったらゆったり寮にいようと思っていたのに。でも、実は朝の学生発表でのみんなの発表は授業やPJのいいアイデアや勉強になっています。信愛で過ごす夏休みはきっと今よりみんな時間ができるから遊べるかな...？ 屋上BBQの日程を早く決めたいとうずうずしています。

*1 プロジェクトのこと(編集部註)

『この世界の片隅に』を見ての感想対談

伊藤紫歩(2年): 伊藤と記述。

手束響希(3年): 手束と記述。

三宅能阿(4年): 三宅と記述。

三宅: 映画を見て、どうだった？

手束: 原爆が落ちたヒロシマじゃなく、呉から広島原爆を見ることによって、原爆の悲惨さだけじゃなくて、戦争が激化する前後の当たり前の日常の尊さを感じることができたよね。

伊藤: 私たちは戦争を知らないから、広島原爆に対して、距離を感じるけど、呉も広島市内から、20キロくらい離れていて、どこか、私も重ね合わせやすい部分があった気がする。

三宅: 没入しやすかったんだね～。一番印象に残ったシーンは？

伊藤: はるみちゃんが死んじゃう時に、爆弾の火花がパチパチするところで、晴美ちゃんとすずの思い出が絵となって思い出されるシーンが印象に残ったかな～。すずが絵を描けなくなるショックは、絵を描く自分に重ねて痛みがひしひしと伝わってきた。

三宅: 絵を描く人ならではの視点だね。

手束: 玉音放送を聞いたすずが泣きながら怒っているシーンは、戦時中で辛い思いをしたり、大切な人を亡くした人にとっては、日本が勝つことでその悲しみが報われると思っていたのかもしれないけど、結局、戦争に日本が負けて、全てが意味のないというか、その、どうしようもない気持ちが伝わってきたかな。

三宅: 勝つことで報われるって考えは、戦争は悪って考えが染みついている私たちには新鮮だね。

手束: この映画を見て、私たちは戦争のことを少しずつ知ったりしたけど、身近な人から戦争体験について聞いたりしたことはある？

伊藤: 私のひいおばあちゃんは戦争の時に自分の娘(私の祖母)を爆弾から守った時に、右手が吹き飛ばされてしまったのだよね。私は、ひいおばあちゃんが右手を無くした当時を見ていないから、すずが右手を無くして、色々なことを思い返して、悲しみに暮れている姿を見たときに、ひいおばあちゃんも同じような思いをしたのかなと思って、悲しくなったな。

三宅: 私たちの世代は、本人から体験談を聞く機会が、ほとんどないよね。

手束: 確かに。私も、中学・高校の勉強でしか、戦争のことを知る機会がなかったかも。だからこそ、今回、『この世界の片隅に』を見て、もっと、戦争のことについて知るべきだなと感じたし、『この世界の片隅に』は原爆や戦争のことを学び始めるときに見るには、とてもいいと思ったんだけど、どう思う？

伊藤: そう思う。最初にも、話したと思うけど、戦時下の中でも、日常は流れていて、それは当たり前だし、だけど、戦争によってすぐ壊すことも出来るから、当たり前はとてありがたいよね。

三宅: 戦時下の日常が見えることは、現代に生きる私たちに重ね合わせやすいかもね。

手束: だからこそ、『この世界の片隅に』を皆に見て欲しいし、夏に合宿に行って、戦争や原爆の事をしっかり学んで、戦争が日常をすぐ奪ってしまう力があるということを忘れないようにしないとだと思ったね。

* 編集部注: 6月18日(土)19時から合宿事前勉強会として片渕須直監督『この世界の片隅に』(2017年)を鑑賞し、7名が参加した。今年度の合宿は広島を訪れる予定。

ついに今年度初めての読書会(*1)が開かれた。題材は夏目漱石『ころ』。著者の代表的な後期三部作を締めくくる、言わずと知れた作品である。今回は伊藤さんによる推薦で、読書会で扱うことになった。参加者が各自で読んできて、疑問点や自分なりの解釈を述べ合うといった形式。信愛のロビーでの五月の午後のひととき、薫風を肌を感じながら、充実した時間を過ごせたように思う。

内容はもうすでに読んだことのある方が大半であるだろうから、特にここで述べることはしないが、私がいくつかの『ころ』についての解説書や研究書を読む中で感じたことは、さまざまな分野からこの作品の捉え返しが起こっているということである。例えばその媒体としては、フェミニズムやポストコロナアル批評、精神分析の導入や、長らく社会問題となっている自殺に対する対応策からの応答など、多岐にわたる(石原千秋責任編集『夏目漱石「ころ」をどう読むか』、河出書房新社、2014年を参照)。教科書で読んだときには、こんな広がりを持っているようには思えなかった、ある意味ですでに「解釈が確定された」とさえ勝手に思っていた作品のイメージが解体し、作品自体の隙間と読者に残された解釈の余地というものを体感することになった。この落差の体感、日本における文学理解の仕方の一つの大転換を追体験することでもある。以前では、文学の読解は作品に込められた作者の意図、メッセージをいかに理解するかということに主眼が置かれていた。その大きな目的のために、時代考証がなされたり、夏目漱石という著者自身の体験や経験が重要な材料になっていた。このような理解の仕方は、「作品論」や「作家論」と呼ばれる。しかし、「テキスト論」と言われるものの誕生によって、「作者」という絶対的な読解の対象であり、到達点でもあったものが、その地位から引きずり下ろされた。代わってその地位についたのが、文章のまとまりそれ自体、「テキスト」と呼ばれるものである。

文章は、現実世界の出来事のように、はっきりとした相貌を持っていない。たとえ同じ情景を文章に起こすにしても、書き手によって当然異なる文章が生まれるだろうし、また読み手によっても同じ文章から得られるイメージは違うだろう。そのように文章のまとまりとしての「テキスト」は、読者の介入を必要とするところとしての「空所」を持っている。この空所を埋めるのは、作家論・作品論では作者であり、テキスト論では読者なのである。当然、読者に判断が委ねられているので、さまざまな解釈が生まれてくることになる。そして、それらの解釈は作者の追認を得なくても構わないのである。たとえば、『ころ』における、先生と「私」、Kと先生の同性愛関係、明治から大正への時代変化に対応する先生と「私」の対応など、テキストの狭間から解体、構築がさまざまに可能になる。要は読者が自由に想像をめぐらしながら、読者の関心で読みを成立させて好いのである。

読書会に参加するというハードルの高さを、「正しい読みをしなければならない」というところにおいている人がもしいるならば、上記の通り、「正しい読み」が現在文学の世界で存在しないということが相場になってきているのであるから、全くそんな心配はいらない。自由に闊達に自分の思うところを述べてほしい。それが、文学作品を読む読書会の楽しみである。

*1 読書会は5月28日(土)に開催し、夏目漱石『ころ』を読んだ。3名が参加した。

ZOE編集部です。最近とても暑いですね。先週末ぐらいに梅雨が明けたかと思ったら、3日間連続で猛暑日という熱帯地獄！暑さでどうにかなってしまいそうですが、体調管理に気を付けて今学期も乗り切ろうと思います。

さて、今回は卒舎生と舎生の近況報告と映画会・読書会報告というラインナップになりました。前号と比べると少し内容が少なくなりましたが(汗)、次号に向けて引き続き頑張っていこうと思います。次回は6月26日の春オリのことやトラッシュムービー特集などを書いてもらいたいな—と思っています。

編集部員の声

『ZOE』第11号を出すことが出来ました。自分の就活のことを書こうと思ったのですが、修論の準備で大変なので断念…。次回以降に書きます。それにしても修論やばい。終わる気がしないです。(編集部 S.K)

自分自身の研究室の活動はあまりみんな馴染みがないと思ったので紹介いたしました。7月は出張だらけで少し億劫です。また、他の内容もみてみると今回はバラエティに富んだ内容となったように思います。これまでのzoeで、対談形式の原稿は初めてみたのでとても面白くていいなと思いました。映画会と読書会がちゃんと引き継がれているのもすごいなと思います。

(編集部 S.Y)

最近卒舎した仲間の文書を読めて嬉しいです。私自身もあと少しで卒舎です。社会人生活について書けるのはzoe何号かな。

(編集部 R.F)

(2022年6月30日発行)